

漢川行 (其の一)



さらば、武漢よ！

一週間前までは王瑩(ワンイン)①に何度も言っていた。「武漢(ウーハン)がどれほど緊迫した状況に陥ろうとも私は離れない。最後になったら故郷の信陽(シンヤン)や潢川(ホアンチュアン)に帰ってでも仕事をする。」しかしこの決意は泡のように消え去った。それはなぜか？ 『弾花(ダンファ)』②の問題があったからだ。

①王瑩(1913-1974)……中国の代表的女優で脚本家、作家、歌手として活躍した。女優時代の江青(毛沢東の妻)からライバル視され嫉妬されていたため、文革時には反乱分子というレッテルを貼られ投獄され獄中死した。

②『弾花』……趙清閣の編集により抗日戦開始後初めて出版された文芸誌。発行所は華中図書公司。期間 1938 年 3 月から 1941 年。

政府が疎開命令を出し印刷所が次々と後方③に移り、書き手が少なくなり、出版社も発行する責任が負えなくなった。すべての困難は敵の爆撃によって作り出されたものだ。

私は『弾花』の発行を中断することに耐えられなかった。創刊時のあらゆる苦勞、種々の困難を乗り越えてやっと創刊にこぎつけたときのことが思い出された。大きな効果はないにしても、少なくとも創刊以来、每期、数百冊が順次発行されることで数を増やし、第一戦区と第五戦区④の兵士たちの手に届き、ページがめくられる。『弾花』は兵士たちに、後方では同胞が文字を通して自分たちを励まし慰労しているのだ、ということ伝えるだろう。それは彼らにとって、精神の糧、闘争の力の後ろ盾となり、彼らに安らぎと慰めを与え、奮起させ、さらに喜んで悪鬼との戦いに挑む力を与えることだろう。ただこの一点をもってしても、『弾花』がまさにこの大事な時代に存在する必要性があるのだ。

さらに、後方にいる人々に向かって抗日戦を訴える宣伝活動にも、尽力できるだろう。『弾花』は創刊時の目的に背いてはおらず、社会が“彼女(弾花)”に寄せている期待にも背いていないと、私は深く信じている。その“彼女”は生まれて三か月にも達していない。それなのに命を終わらせてしまうことなど、どうしてできよう。私は“彼女”をこれからも育て上げて大きくしなければならぬ。この責任を放棄することはできない。こう決めるとすぐ船の切符の手配を開始し、文姉さん(楊郁文(ヤンユーウェン) 趙清閣の従姉)と走り回った。四川(スーチュアン)に入る道は一本しかない。

③後方……ここでは抗日戦争期に国民党統治地区で日本軍に占領されなかった中国西部と西北部を指す。

④第一戦区と第五戦区……1937年盧溝橋事件の勃発後、国民党政府が戦争情勢に対応するために国内を計画的に区分した戦区。第一戦区には河北省、山東省北部が、第五線区には山東省南部、江蘇省北部が含まれる。

七月九日の午後のことだった。友人に手伝ってもらって避難民を疎開させるための船“大豫(ダーユー)”⑤の切符を買った。翌日出発との話で急いで荷物をまとめはじめた。王瑩に武漢を離れるいきさつを手紙に書いて出すつもりでいたが、出せないでいた。もし本当に私が四川に行ったら、もう私を相手にしない、と冗談ではあるが彼女が言っていたので、ひょっとしたらこのことを許してくれないかもしれない、と思ったからだ。

夜通し雨が降っていた。文姉さんといっしょに彼女の叔父、陳(チェン)先生⑥のところに別れのあいさつに行った。彼は私たちを激励し、一人の芸術家として成功することの難しさを話してくれた。「絶えず努力し創作を続けること。絶えず現実と戦い悪い環境を克服すること。特に女性は、忍耐力を持ち、厳しい仕事に耐える意志を持ってはじめて成功する。」このような話を聞いて私は大きな啓示を受け、彼に深く感謝して別れを告げた。

翌日もあいかわらずしとしとと小雨が降っていた。舒群(シューチュン)⑦に会った。今日は霧が深いから出航できないと彼は断言した。私は信じなかったが、水上旅行に関するいろいろなことを話してくれた。もともと彼は海軍にいたので、この二日間に長江沿いで行われた日本軍との戦いで亡くなった若き海軍の戦士たち——彼の同級生たちのために、ここで哀悼していたのだ。

⑤ “大豫”は船の名前。“豫”は河南省の別称だが書面語として「喜ぶ、楽しい」という意味も含まれている。

⑥ 先生……中国で「先生」は教師だけではなく、男女ともに使われる尊称の一つ。

⑦ 舒群(1913-1989)……共産党員作家として情報活動に従事。抗日戦勃発後重慶に赴いた。

午後、老舎(ラオシャ)⑧が“同春酒館”で送別会を開いてくれ、親切にいろいろな話をして励ましてくれた。彼は、「後方に行くのは、目先の安楽を求め無為に過ごすためではない。直接的であれ間接的であれ抗日戦の活動をするのであれば、それはすべて価値のあることだ。ペンで仕事をしている者は実際に銃を扱うことはできない。だから前線に行ったとしても何の役にも立たない。」と言った。それで私はさらに四川行きの決心を固くし、同時に一人の「良き師、良き友」との別れを惜しんだ。

舒群が話していたとおり、出港日は翌日の夜間に変更になった。空はどんよりとしていた。心の中ではこう思った。「船はやっぱり出港できなかった。強い風が吹いたらいいな。大波が起きたらあと何日かはここに残ることができる。」

本当に、武漢を離れるのは私にとって辛いことだった。朝早く文姉さんといっしょに、私たちがこれまで足跡を残した場所を、まるで何か探し物でもしているかのように歩き回った。だがそれは、ただ虚しく漂っているようなものだった。辛い気持ちを抱いて西洋レストラン“一家春”をながめ、“世界劇場”を通り過ぎようとしたとき、突然門の前にしつらえられた高い献金台を取り囲んでいる群衆が目に入った。みんな

は大きな声で熱烈に怒鳴り、押し合いながら台に向かって紙幣や小銭を投げ入れていた。

「何だろう？」私はそっと文姉さんに尋ねた。軍楽隊が“救亡歌”⑨を演奏しながら、ぎこちなく蛇のようにならぬって行列を引き連れて近づいてきた。「七七〔盧溝橋事件を指す〕」を思い出し一人一人が政府に献金しなければならない！」と、怒鳴るようなかけ声が聞こえてきた。ああ！「七七」の二文字がハンマーのように頭に振り下ろされ目が覚めた。去年の今日、蘆溝橋で抗日戦争の第一砲が轟いたのだということ思い出した。

あのとき私の魂は深い所で燃やされ、たいまつ火となり、全中華民族が日本に対する報復心と鬱憤をあふれさせたのだ！すべての者が抗日という一つの目標のために奮闘しようと、戦場に立とうと自然に集まってきた。大きな希望と勝利の信念を持っていない者はなかった。

しかし今日まで敵はたびたび北京、上海、天津、山東省、北京の周辺地域、河北のあたり、それに私の故郷——河南を襲い占領した。どれだけの美しい都市が爆撃され焼け野原となったことか、どれほど多くの戦士の血が長江と黄河を赤く染めたことか！ 敵に惨殺された罪のない同胞の遺体が野原に横たわった！そこは憎しみの底なし海と化した！この一年間の血の負債は計算することができないほどだ！

強盗にこのまま好き勝手なことをさせておいていいのか？ だめだ、絶対にだめだ。たとえ一丁の銃、一発の弾丸、一人の戦士だけになっても、我々はさらに力を入れて敵と戦い、命をかけて最終的な勝利を勝ち取らなければならない。同胞よ、金のあるものは金を出し、力のあるものは力を出せ！さもなくば来年の今日、さらに予想もできないような悲惨な状況に陥るだろう！ たった今も、敵は我々の心臓部、武漢に近づいて来ようとしているのだ！

立ち上がれ 奴隷になるのを拒否する人々よ！

我らの血肉をもって 新しい長城を築きあげようではないか！

中華民族は最も危険な時代に至っているのだ。……

何という勇壮な歌声よ！ ああ、私は興奮のあまり気が狂いそうになった。涙を浮かべた目で文姉さんに言った。「私は武漢を離れない。鬼子(グイズ)⑩を待って、とことんやってやる。ペン先でも彼らの目を突くことができる！」そうだ、こぶしでも鬼子の心臓をたたくことができるじゃないか！ 決めた。私はためらうことなく献金台に向かった。そして毅然として大衆が作った鉄壁の隊列に加わった。

⑧老舎(1899-1966)……小説家、劇作家。有名な戯曲『茶館』の作者。

⑨“救亡歌”……1934年から救亡運動の一環として抗日映画が製作され、劇中で使われた“義勇軍行進曲”や“前進歌”などが当時広範囲に流布していた。

⑩鬼子(ガイジ)……外国人に対する蔑称。ここでは日本人を指している。

夕方になると雨が止んで夕陽が出てきた。江漢関〔漢口税関〕から疲れた体を引きずって戻ってきた。一つの使命を果たしたように非常に気分が軽かった。だが、門を入ると文姉さんが言った。「船は今晚出発よ。さあ、荷物をみんなまとめて。」

「何ですって？」私はびっくりして飛び上がった。「わがまま言っちゃだめよ！『弾花』のためでしょう。“彼女”を延命させるためにここを離れなきゃならないのよ。華中会社の社長も手紙を送って来たわ、あなたが早く重慶に行って復刊することを望んでいるって。ねえ、後方でも同じようにたくさんの仕事ができるから。」文姉さんは優しく私をなだめた。

「でも後退するなんて臆病なことはしたくない！」

「違う、決してそんな単純な逃亡じゃない。後方であなたにはあなたの使命がある」私はついに文姉さんに説得され、心の中では闘いながらもついに引っ張られるようにして乗船した。

船は港を離れた。大波が悠々とした長江の水面に向かっていった。波は逆巻き、水面にできる無数のしわ模様が、葬儀に参列して泣いている老人の顔のようだった。夜明けが暗い夜を送り出した。ぼんやりと立ちこめる霧の中、船は出航したのだ。

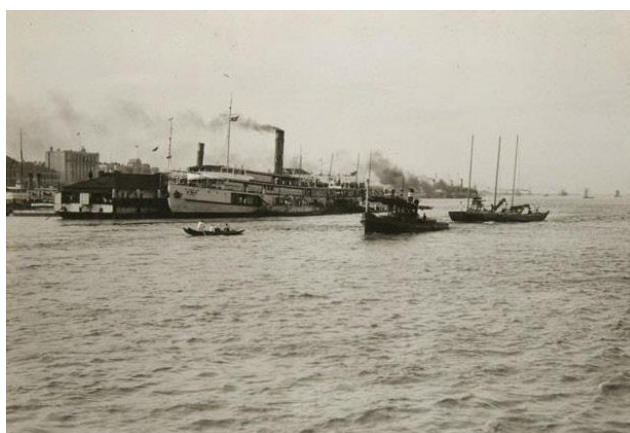
涙にぬれた目であのそびえたつ偉大な魂、三鎮⑩との再会を熱望した。そして親友と別れるかのように恋々とした悲痛な気持ちを抱えていた。この時、たちこめる霞のような小雨の音と泣き声が混じり合い、この世で最も暗くて悲愴な交響曲を演奏していた。

「さらば、武漢よ！」私は震えている右手を伸ばし、武漢に向って敬礼した。――胸が張り裂けんばかりだった。

⑩三鎮……武漢市は長江中流域にある重要都市で、武昌、漢陽、漢口の三つの都市から成り立っている。これらが武漢三鎮と呼ばれていた。「鎮」は旧制の行政区単位では人口五万人以上を擁する都市を意味していた。



←武漢の江岸街



漢口埠頭で出航を待つ船→

焼ける船室

太陽が炎のようになって大地を焼き焦がしていた。船縁りに座って穏やかに揺れる水面を見ていると感傷的な気分が湧いてきて、風に乗って帰りたいと痛切に感じた。それは人生における最初の水上の旅だったが、少しも興味が湧いてこなかった。ただいらだってうんざりしていた。

船底、船室、甲板は人でひしめき合っていて、足を挿し入れる隙間もないほどだった。船底(つまり最下層部)は大部屋で貨物室と隣接し、半尺の通路を残してすべてに敷物が隣り合って敷かれていた。“二階”と呼ばれている中間部には収容人数が可変的な行軍用の船室があり、甲板(もっとも高い部分)の自由区の船室には数え切れない敷物が全体に敷き詰められていた。

高級船室の貴族地区を除いて、機関室の排気口は中層部と底層部に向かって開いている。何たることだ。これが私に溜息をつかせる大きな原因となっている。昼も夜も

乾燥炉の中にいるようなもので、どれだけ拭いても汗をかく。いや、流しても流しきれないほどの油を流しているようだった。

少しの安らぎを得ようとしても無理で、ただ船のへりをうろうろするほかなかった。太陽を避けて昼を過ごす。みんな、東西方向が少しでも涼しそうならそこへ行き、南北方向が少し暗いようだったらそちらへ行く。たとえ立ちつづけて足がだるくなってもだれも船室へ入る度胸はない。それで船はいつも重心が片方に傾いているので、亀のようにゆっくりと這うようにして進んでいった。

夜になると高級船室の住人は電気扇風機で安眠することができる。甲板の住人も大自然の団扇の風を受け夢の世界に入ることができる。しかし苦しいのは普通船室にいる私たちで、部屋の中でも眠れず外に出ても空いた場所はなく、うちわを持つ手を休めずに動かしながら、入り口の外でうとうとするしかなかった。

私は本当に耐えられなかった。幸いにも窓際にある二枚の敷物の上で寝ることはできたが、そうじゃなかったら文姉さんはもう耐えきれなかつたろう。ましてもともと虚弱な私のような人間にはなおさら大変だった。幸いにも文姉さんがいい方法を思いついた。部屋の真ん中の燃えているような床の上に、トランクを使って一人用の小さな寝台をつくり、外に開いている扉のほうに頭を向けて寝る。すると、体は依然として蒸され焼かれてはいるのだが、ときどき風が吹き込むようなこともある。

だが、私はやはり眠れなかった。少し横になると服が濡れるほど汗をかいた。仕方なく船縁りの通路にあるただ一つの、東の間ほっとさせてくれる鉄製の腰掛けの上でぼんやりとしていた。夜になると通る者がいないのでゆっくりと坐って風に当たって涼んでいられる。私以外にも、隣室の楊(ヤン)先生と熊(ジョン)先生が夜通し座って、やれ他人のいびきがうるさいだの、この船に乗ったのが身の不運だとか、文句を言い合っていた。

ところで、私は文姉さんの秘められた能力に感心しないわけにはいかなかった。翌日の晩、何とやり方を進歩させ、私のために移動寝台を作ってくれたのだ。入り口の外に、二つの荷物で挟まれた幅二尺、長さ三尺の空間をでき、その間に敷物が敷かれた。足を曲げて寝なければいけなかったのだが、風が当たって涼しいことはこれまでとは比べものにならなかった。三日目に年配の茶房(チャーファン)①が同情して木板のマットを下に敷いてくれたので心地よくなった。

加えてこの二日間は月が出て星の少ない好天で、私たちの乗った船は、底まで見えるような透き通ったきれいな水の上を進んでいった。かすかな波紋をつくる水面は撚(よ)りかけた絹の絨毯のようで、はるか遠くに見える幾重にも重なり合う灰色の

山々、密集して生えている樹木は、この世で最も静かで美しい絵画。波の音やカモメの鳴き声は、世界中で最も低くそして高く響くメロディーだった。

もうすぐ夜明けだ。あたりがしんと静まり返っている中で私は船首にたたずみ、巨大な黄金色の恒星が没していく光景を名残惜し気に眺めていた。すると東の空が半分真っ赤になり、まぶしく燃える熱い光の下のほうから太陽が徐々に昇ってきた。遠く離れたところからニワトリや犬の鳴き声が聞こえてきた。これらが、船上での生活に対する私の興味を引き起こした。

昼間は十二時間、あちらこちらをうろうろする。夜が私の世界で、いつも心ゆくまで月とおしゃべりをし、明け方、ペンを手にして箱の上で数行の日記を書き、思索にふける。この二日で一幕劇『上了老子的当 (俺様に騙された)』の構成を考えはじめた。

①茶房(チャーファン)……昔の言い方で、ホテル、料理店、汽車、汽船などで働くボーイ、給仕人、雑用係を指す。

三 難

船上では寝ること以外にも難儀なことがあった。それは食事、排泄、入浴の問題だ。

食事は毎日三回で、午前七時から夜の八時までテーブルに次々と料理が載せられる。見ると厨房の中では、両足を止めるひまもないほど忙しく人々が立ち働いている。茶房(チャーファン)が頭上にできたばかりの熱々の料理を載せて運ぶ。ひとつ間違えて転倒でもしたら旅客が危険に遭う。だから彼らは行ったり来たりするときにいつも大声で怒鳴っている。「熱湯だよ！ 熱湯が通るよ！」

実は、ときどきは嘘を言っている。暑い時に熱湯をかぶると全身水ぶくれになるのは明らかで、「早く通り道を開けないわけにはいかない」、とみんなに思わせるために脅しているだけなのだ。彼らの頭上にあるのは空になった盆だという光景がよく見られるが、それでも彼らは怒鳴らなければならない。「熱湯だよ！」

食事は悪くはなかった。大部屋の者も船室にいる者もすべて同様の待遇だ。だが席には区別があって、甲板のテーブルでは大部屋の乗客——つまり労働者や平民が食べる。“二階”のテーブルでは高級船室と普通船室にいる旅客——つまり小資本者階級の公務員や商人、紳士淑女たちが食べる。理由はもちろん上層人が「下層人は汚い」といって嫌がっているからだ。もしいっしょに座って食事をしたら上層人は下層人が

がつがつと食べる姿や粗末な服を着ているのを見て、ぷっと吹き出すかもしれないし、吐き気を催すかもしれない。しかし私と文姉さんは下層人の人々と同じテーブルに座ることが好きだった。たぶん私たちが自分自身を上層人だと思っただけではないからだろう。上層人といっしょに座ったらかえって不快になってしまう。

ある日の朝、文姉さんは上まで行くのがおっくうだったので、私を連れて近くにある二階のテーブル席に食事に行った。朝食はおかゆで、思いがけずまだ食べ終わっていない人がたくさんいて待っていた。腰掛けに座って待っていた桂先生が私たちを見ると急いで席を空けてくれた。もともと一人分の席に私と文姉さん二人で座った。窮屈だったが私は痩せていたので、腰掛けの端を占めていただけだった。それなのに、ちょうど隣で食事をしている女の気に障ったようだった。

髪にちりちりに広がったパーマをかけ口紅を塗り、ハイヒールを履いた若い娘だった。彼女は奇妙なもったいぶった態度で、体を少し私から離すようにして座り、おかゆをフーフー言わせて食べ、小さな声で言った。「まったく熱いわね！ 邪魔しないでほしいわ！」そして続けて自分の隣にいた仲間に命じた。「あなたは行かなくていいのよ。私たちはゆっくりし食べていいんだから。」

これを聞いて私はかっとして頬を紅潮させ、すぐに立ち上がった。文姉さんは私がけんかをするかもしれないと思い、私を引っぱってそこから出て行った。侮辱された私は全身怒りに震え、戻って駆け寄り、詰問したかった。

「あなたは私のことを何だと思っているのですか？ あなたはどんな高貴な身分の人なのですか？ ここを一人で貸し切っているのですか？ もし勇気があるのなら前線に行って鬼子(グィス)と戦ってみなさい。そこではじめてあなたには勇気があるとみなされるのです。」

だが文姉さんが止めていたので、私はただ心の中で怒っているしかなかった。しばらくして桂先生が私のところに来て言った。彼は私に代わって報復してくれたというのだ。彼は彼女に「船が暑くて混んでいて不快だというのなら、どうして飛行機に乗らないんですか？ わざわざ値段の安いこんな船に乗らなくてもいいじゃないですか？」と皮肉を言ったというのだ。ほんとうだ、こんなところでかっこうをつける必要はない。桂先生は私よりも怒っていてさらに罵った。「ちくしょう！ 娼婦かあるいは妾のたぐいでしょうよ。もしみんなの笑いものにならないんだったら、一回なぐってすっきりしたかった。」

朝食はもう食べなかった。心の中で考えた。食事をするのは難儀なことだ。本当に難儀だ。実は、毎回の食事時、早く行って押し合いながら空いている席を待つのが恥

ずかしかったので、私たちはいつもみんなが食べ終わる最後の一つか二つのテーブルが空いたころに行くようにしていたのだ。それに上層人用のレストランにはもともと行かないようにしていたのだ。

いつも朝食は11時まで待ち、昼食は3時まで待ち、夕食は9時まで待った。こうするとお腹が空いてひもじい思いをするのだが、気分的には楽だった。同じテーブルについていた人たちはみんな人情味があり素朴で邪気のない、愛すべき労働者たちだった。彼らは決して無礼ではない。彼らは先に言ったようなあの子のご婦人たちと比べると、はるかに文明人だ。彼らは決して汚くはない。香水の香りを撒き散らしてはいないが、一人一人がとても清潔だ。彼らがあつがあつと食べることはない。きちんと箸を使って礼儀正しく食事をする。彼らと抗日戦を話題にしても、激昂したり憤慨したりすることはなく、ただ声々に兵隊になって戦場で戦いたいものだと言う。このような状況は上層人用のテーブルでは決してみられなかった。

食事の難儀の次に排泄の難儀があった。船には男性用、女性用の二か所の手洗いしかなく、朝から晩まで顧客は絶えなかった。入口には列ができ、一人が出てきたら一人が入るといった具合だった。強者が先に入り、老人や弱者には両足がだるくなるまで待たないと順番が回ってこなかった。

私はいつも夜遅く、みんなが寝てしまったころになってやっと入った。中はとても汚く臭かった。茶房(チャーファン)も掃除にはこなかった。毎回入るたびに鼻をつまんで息を止める。この「味わい」は本当にたまらなかった。

入浴はとくに難儀だった。船には浴室がなく、荷物で圧死するのを防ぐために船室は扉を閉めることができなかった。人も多くとても不便だった。体が汚れてくると、他人の汗の匂いを嗅ぐのが気持ち悪いだけでなく、自分の臭いでさえ耐えがたかった。一日に何度着替えをしてもだめだった。しかし文姉さんはこれにも対処できた。シーツで出口を遮り、さっと体の汗を拭くのだが、これで少しはましになった。

ああ、本当に難儀なことだ！

□□□□□